CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

自然体験と道徳的な意義に関する基礎的な研究 ： 道徳的な意義を探る質問紙法の開発

著者名(日)	石井 雅幸，佐藤 美幸，木村 かおる
雑誌名	大妻女子大学家政系研究紀要
巻	51
ページ	65-71
発行年	2015-03-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006007/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

自然体験と道徳的な意義に関する基礎的な研究
― 道徳的な意義を探る質問紙法の開発 ―

石井雅幸[1)]・佐藤美幸[2)]・木村かおる[3)]
[1)]大妻女子大学家政学部児童学科，[2)]25 年度大妻女子大学児童学科，[3)]科学技術館

A Basic Study on Outdoor Moral Significance Carrying Out an Experience-based Activity
― Through the Development of the Questionnaire Method to Investigate Moral Significance ―

Masayuki Ishii, Miyuki Satou and Kaoru Kimura

Key Words : 小学生，自然体験，道徳，学習指導要領，質問紙法

要旨

自然体験と道徳観の関連に関する研究はこれまでにいくつか報告されているが、学習指導要領の内容項目と対応させた研究は見いだすことができなかった。そこで、学習指導要領の 4 つの内容項目に該当する質問紙を開発した。その質問紙を用いて、自然観察活動をよく行っている自然観察クラブに参加している小学生と公立小学校に在籍する小学生で道徳の内容項目の質問項目並びに自然体験の度合いで違いが見られた。このことから、開発した質問紙は自然体験の度合いや道徳の内容項目に対する行動を行っている傾向の判別性があることが明らかになった。

1　問題の所存

平成 20 年告示の小学校学習指導要領総則第 1 章第 1 の 2 において、「道徳教育をすすめるにあたっては、宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。」と述べられている。また、平成 11 年生涯学習審議会「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」の答申では、自然体験が豊かな子どもほど道徳観・正義感が充実していると述べている。自然体験活動は、子どもに道徳観を育てることが述べられている。

そこで、自然体験と道徳観との関連に関する先行研究を概観すると、川崎ら（2004）が「小学校の「自然体験」と「生活体験」に関する実態調査」において「自然体験の多い子どもほど影響が顕著であり、協調性に富むなど道徳観が培われていったものだと考えられる。」と述べている。土屋（1999）は、自然体験の多い子どもほど道徳観と正義感が充実していると述べている。高原ら（2006）や斎藤（1998）においては、自然体験の教育的な効果を論じているが、道徳との関連までは論じていない。道徳に関する具体的な内容は、小学校学習指導要領において 4 つの内容項目（1　主として自分自身に関すること。2　主として他の人とのかかわりに関すること。3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること。4　主として集団や社会とのかかわりに関すること。）として示されている。

これまでの先行研究においてはこれら道徳の 4 つの内容項目と自然体験との関連を明らかにする報告は見いだすことができなかった。

そこで、研究の目的は以下の通りとした。

2　研究の目的

1）　道徳の 4 つの内容項目と自然体験を測定する質問紙の開発

2）　自然観察を行うクラブに所属する小学生と公立小学校に通う小学生との自然体験の度合いや道徳の内容項目の達成程度の違いがあるか否かの検討

3　方法

3･1　調査問題

質問紙の開発にあたり、現行の小学校学習指導要領道徳（平成 20 年告示）で記載されている以下の 4 つの内容項目にそって行った。

「I　主として自分自身に関すること」

「II　主として他の人とのかかわりに関すること」
「III　主として自然の崇高なものとのかかわりに関すること」
「IV　主として集団や社会とのかかわりに関すること」

上記の道徳の内容の他に自然体験と生活体験の項目を作成した。

小学校中学年に示されている4つの内容項目それぞれの内容をもとに81の質問項目を作成した。内容に示されたことが行動として行っているのかを問う質問とした。その質問項目を使って平成25年度本学部児童学科第1学年116名を対象にした予備調査を行い、因子分析並びに質問項目の内容の妥当性を現職の小学校校長並びに現職小学校教諭と元小学校教諭合わせて3名に検討を依頼した。それらの結果をもとに25項目の質問項目に精査していった。

回答は五段階尺度（1　いつもしている（とてもそう思う）・2　ときどきしている（そう思う）・3　どちらともいえない・4　ほとんどしていない（あまり思わない）・5　していない（思わない））で反応させた。すなわち、質問項目に対して1が強く肯定、2が肯定、3がどちらともいえない、4が否定、5が強く否定に反応させるようにした。

3·2　調査対象

質問項目は、25項目から構成した。調査の対象は、本学部の児童臨床研究センターで2013年に小学校第4学年から第6学年から公募したNクラブ（年に3回の観察活動を行う）に参加した児童並びに多摩地区の公的な機関が行っている東京都多摩地区に在住する子どもから公募して参加したSクラブ（年に15回ほどの観察会を行う）の児童をクラブ員（47名）とした。また、東京都内の公立小学校2校の第4、5、6学年の児童（299名）並びに埼玉県所沢市内の公立小学校1校の第4、5、6学年の児童（316名）を対象として質問紙調査を行った（表1）。なお、調査時期は、2013年7月から9月にかけて行った。

表1　調査対象の子ども

	第4学年	第5学年	第6学年	合　計
都内I小	43名	46名	48名	137名
都内F小	52名	50名	60名	162名
埼玉T小	113名	97名	106名	316名
Sクラブ	6名	17名	6名	29名
Nクラブ	4名	12名	2名	18名
合　計	218名	222名	222名	662名

3·3　分析方法

分析方法は、以下の考え方で行った。

開発した質問紙の妥当性と信頼性については、次の様に考えた。開発した25項目の質問は、4つの道徳の質問項目並びに生活体験や自然体験の5種の尺度に対応するように分類されると考えられる。このため、小学生を対象とした調査の天井効果が見られた項目を除く21項目に対する662名の反応値を因子分析することから統計的な妥当性を調べた。なお、前述したように予備調査問題の段階で内容的な妥当性を検討していることからここではその手続きを省略した。また、質問項目の信頼性に関しては、Cronbachのα係数を算出することから調べた。

次に、質問項目に関しての体験の度合いの差による違いを見いだすことができるかどうかの判別性に関しては、以下のように考える。クラブと公立学校の子どもに違いが見られるならば、それぞれの質問項目の5段階の尺度値を等間隔尺度と仮定して見たとき、各質問項目の平均値の差となって顕在化してくると考えられる。そこで、各質問項目毎に、クラブと公立学校とでの平均値の差の検定を行った。なお、統計的な分析には、IBM SPSS Statics22を使用した。

4　結果

4·1　調査項目の統計的な妥当性と信頼性

4.1.A　統計的な妥当性

開発した質問項目の構成概念妥当性を検討するため、天井効果を示した4項目を除く21項目に対する662名の反応値を因子分析した。21項目は、「I　主として自分自身に関すること。」「II　主として他の人とのかかわりに関すること。」「III　主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること。」「IV　主として集団や社会とのかかわりに関すること。」並びに「生活や自然に関する体験」の5つ抽出できると考えられる。最低因子数を1に設定してバリマックス回転を行った。その結果を表2に示す。表2は小数点以下の数値のみを示す。この表においては、各項目が5つのいずれかの因子に含まれていくということを想定して、因子を構成する質問項目を抽出した。なお、因子負荷量0.34以上のものを各因子を構成する項目と判断した。その結果、4つの因子に集約された。そこで、各因子に含まれる質問

表 2　因子分析の結果

	因子			
	1	2	3	4
II　8　自分と他	0.688			
I　5　どんなことでも	0.591			
IV　14　学校の約束	0.578			
IV　16　学校楽しい	0.564			
I　1　悪かったこと	0.551			
II　10　こまってる	0.520			
I　4　自分の良い	0.504			
I　3　友達が悪い	0.472			
II　6　挨拶	0.470			
IV　15　日本良い	0.350			
II　9　面倒	0.343			
生　20　清掃		0.731		
生　18　洗濯		0.521		
生　17　ナイフ		0.509		
生　21　食事		0.430		
自　22　野鳥			0.677	
自　23　太陽			0.562	
自　24　木の実			0.532	
自　25　魚釣り			0.489	
III　11　自然感動				0.722
III　12　自然まもる				0.436

因子抽出法：主因子法
回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法
a.　6 回の反復で回転が収束しました。

項目を見ると、第 1 因子が質問項目の 1、3、4、5、6、8、9、10、14、15、16、第 2 因子が質問項目の 17、18、20、21、第 3 因子が質問項目の 22、23、24、25、第 4 因子が質問項目の 11、12 であった。ここで、因子分析の各因子の結果と道徳の内容項目等との関係を調べる。表 3 の開発した質問項目表からわかるように、質問項目の 1、3、4、5、6、8、9、10、14、15、16 は、道徳の内容項目 I、II、IV に該当する。質問項目の 17、18、20、21 は、生活経験に該当する。質問項目の 22、23、24、25 は、自然体験に該当する。質問項目の 11、12 は、道徳の内容項目 III に該当する。このことから、因子 1 と 2

表 3　資料　開発した質問項目

I　主として自分自身に関すること	1　私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている
	3　私は友達が悪いことをしていたら注意している
	4　自分の性格の中で良いところを知っている
	5　私はどんなことでも一生懸命に取り組んでいる
II　主として他の人とのかかわりに関すること	6　誰に対しても挨拶をしている
	8　自分の考えと他者の考えを大切にすることができる
	9　誰かの面倒をみている
	10　困っている人がいたら助けている
III　主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	11　自然を見て感動したことがある
	12　自然を守っていこうと思う
IV　主として集団や社会とのかかわりに関すること	14　学校の約束や決まりを守っている
	15　日本・日本人の良いところを知っている
	16　学校が楽しい
生活体験	17　ナイフや包丁で果物や野菜を切ること
	18　自分の服を洗濯すること
	20　家の掃除をすること
	21　食事の準備や片付けをすること
自然体験	22　木に止まっている野鳥を見つけたこと
	23　太陽が昇るところ、沈むところを見たこと
	24　木の実や野草などを使って遊んだこと
	25　海、川、池などで魚釣りをしたこと

と 3 及び 4 は、それぞれ、道徳の内容項目 I、II、IV と生活体験と自然体験及び道徳の内容項目 III に対応しているといえる。従って、21 項目は構成概念妥当性があるといえる。なお、道徳の内容項目 I、II、IV と道徳の内容項目 III とでは、学校を中心とした生活を行っている児童を考えると、主として自分自身に関すること、主として他の人とのかかわり

表4　信頼性係数

	信頼性係数α	
	因子内	全項目
因子1	0.835	0.865
因子2	0.696	
因子3	0.695	
因子4	0.664	

に関すること、主として集団や社会とのかかわりに関することは、非常に近く考えていく傾向にあることが想定される。その面からも、質問項目の構成概念としては、道徳の内容項目のI、II、IVと道徳の内容項目IIIの大きく二つから見ていくことがより妥当といえる……結果I。

4.1.B　信頼性

21項目全部の信頼性係数で調査項目全体の信頼性を、また、4つの因子を構成する項目群毎の信頼性係数で各尺度の信頼性を検討できる。このため21項目全部の信頼性係数と各因子構成項目群毎の信頼性係数とを算出した。その結果を表4の第2欄と第3欄に示す。

これらの欄から次のことが明らかになった。質問項目全体の信頼性係数は0.865である。また、因子1から因子4までの各因子の信頼性係数は0.664から0.835の範囲である。これらの信頼係数の範囲から質問項目全体及び各因子について信頼性はあると考えられる。……結果II。

4·2　道徳の内容項目に関するクラブと公立学校との差について

自然観察の活動などを頻繁に行うクラブに所属する小学生と公立の小学校の小学生とで道徳の内容項目に対応しての行動並びに生活体験、自然体験を行っている度合いは、各質問項目で反応した反応尺度に対応するといえる。各質問項目に対する、尺度値1や2は、肯定的な反応である。また、尺度値4や5は、否定的な反応である。この尺度値を等間隔と仮定したならば、道徳の内容項目を受けた行動を行っていた子どもが多くいる場合には、選択した尺度値はより小さな値となり、尺度値の平均値が限りなく1に近づくといえる。そのことは、より多くの子どもがその質問項目に該当する道徳の内容項目に対して肯定的な反応をする集団であったと判断することができる。同様に、生活体験や自然体験に関しても、この尺度値を等間隔と仮定したならば、各質問項目に該当する生活体験や自然体験を行っていた子どもが多くいる場合には、選択した尺度値はより小さな値となり、尺度値の平均値が限りなく1に近づくといえる。そのことは、より多くの子どもがその体験をより行っている集団であると判断することができる。

そこで、各質問項目の尺度値の平均値の差をクラブの子どもと公立学校の子どもとで比較することにした。その結果を、表5に示す。

この表5から以下のことが言える。

因子1に含まれた道徳の内容項目I、II、IVに関しクラブの子どもと公立小学校の子どもとでは、5%の危険率で以下の質問項目が有意に平均値が低いと言える。「3　私は友達が悪いことをしていたら注意している。」、「4　自分の性格の中で良いところを知っている。」、「5　私はどんなことでも一生懸命に取り組んでいる。」、「6　誰に対しても挨拶をしている。」、「10　困っている人がいたら助けている。」の5項目である。また、同様に1パーセントの危険率で以下の質問項目が有意にクラブの子どもが公立小学校の子どもよりも平均値が低いと言える。「15日本・日本人の良いところを知っている。」の1項目である。以上の6つの質問項目でクラブと公立小学校との間に違いが見いだされた……結果A。

因子4に含まれた道徳の内容項目IIIに関しては、クラブの子どもと公立小学校の子どもとでは、1パーセントの危険率で以下の質問項目が有意にクラブの子どもが公立小学校の子どもに比べて平均値が低いと言える。「11　自然を見て感動したことがある。」、「12　自然を守っていこうと思う。」の2項目である。以上の2つの質問項目でクラブと公立小学校との間に違いが見いだされた……結果B。

因子3に含まれた自然体験に関しては、クラブの子どもと公立小学校の子どもとでは、1パーセントの危険率で以下の質問項目が有意にクラブの子どもが公立小学校の子どもに比べて平均値が低いと言える。「22　木に止まっている野鳥を見付けたこと。」、「23　太陽が昇るところ、沈むところをみたこと。」、「24　木の実や野草などを使って遊んだこと。」、「25海、川、池などで魚釣りをしたこと。」の4項目である。以上の4つの質問項目でクラブと公立小学校との間に違いが見いだされた……結果C。

因子2に含まれた生活体験の質問項目に関しては、5つの質問項目すべてにおいクラブの子どもと公立小学校の子どもとでは、有意な差が見られなかった。……結果D。

表 5　生活体験の豊かさによる比較（小学校第 456 学年、クラブと公立小学校）

因子				度数	平均値	t の値	df	有意確率（両側）
因子 1	I　主として自分自身に関すること	1　私は悪かったことに気づいたらすぐに謝っている	クラブ	47	1.74	0.99	659	0.32
			公立小学校	614	1.87			
		3　私は友達が悪いことをしていたら注意している	クラブ	46	1.93	2.42	656	0.02
			公立小学校	612	2.28			
		4　自分の性格の中で良いところを知っている	クラブ	45	2.16	2.23	657	0.03
			公立小学校	614	2.54			
		5　私はどんなことでも一生懸命に取り組んでいる	クラブ	47	1.68	2.25	655	0.02
			公立小学校	610	1.98			
	II　主として他の人とのかかわりに関すること	6　誰に対しても挨拶をしている	クラブ	46	1.48	2.35	657	0.02
			公立小学校	613	1.82			
		8　自分の考えと他者の考えを大切にすることができる	クラブ	47	1.81	1.27	654	0.21
			公立小学校	609	1.98			
		9　誰かの面倒をみている	クラブ	45	2.00	1.60	55	0.12
			公立小学校	608	2.25			
		10　困っている人がいたら助けている	クラブ	46	1.83	2.05	654	0.04
			公立小学校	610	2.11			
	IV　主として集団や社会とのかかわりに関すること	14　学校の約束や決まりを守っている	クラブ	47	1.70	1.27	657	0.20
			公立小学校	612	1.86			
		15　日本・日本人の良いところを知っている	クラブ	46	1.61	2.61	653	0.01
			公立小学校	609	2.03			
		16　学校が楽しい	クラブ	47	1.87	0.76	657	0.45
			公立小学校	612	2.00			
因子 4	III　主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	11　自然を見て感動したことがある	クラブ	47	1.43	5.58	65	0.00
			公立小学校	613	2.14			
		12　自然を守っていこうと思う	クラブ	47	1.17	8.01	85	0.00
			公立小学校	608	1.76			
因子 2	生活体験	17　ナイフや包丁で果物や野菜を切ること	クラブ	47	1.83	−1.057	658	0.291
			公立小学校	613	2.02			
		18　自分の服を洗濯すること	クラブ	47	2.83	−1.711	654	0.087
			公立小学校	609	3.19			
		20　家の掃除をすること	クラブ	47	2.38	−.611	656	0.541
			公立小学校	611	2.49			
		21　食事の準備や片付けをすること	クラブ	47	1.72	−.590	655	0.556
			公立小学校	610	1.82			
因子 3	自然体験	22　木に止まっている野鳥を見つけたこと	クラブ	47	1.28	−8.077	85.107	0.000
			公立小学校	610	2.07			
		23　太陽が昇るところ、沈むところを見たこと	クラブ	47	1.89	−4.486	658	0.000
			公立小学校	613	2.85			
		24　木の実や野草などを使って遊んだこと	クラブ	47	1.85	−3.934	658	0.000
			公立小学校	613	2.69			
		25　海、川、池などで魚釣りをしたこと	クラブ	47	2.15	−3.339	659	0.001
			公立小学校	614	2.95			

以上の結果AからDをまとめると、次の様になる。

クラブの子どもと公立小学校の子どもとでは、自然体験に関しては4つすべての質問項目で違いが顕著に見られる。また、同様に道徳の内容項目I、II、IVに関する質問項目については、6項目で違いが見られる。さらに、道徳の内容項目IIIに関する質問項目については、2つのすべての質問項目で違いが顕著に見られる……結果III。

5　まとめと結果の含意

本研究の目的は、2で設定した、① 道徳の4つの内容項目と自然体験を測定する質問紙の開発、②観察を行うクラブに所属する小学生と公立小学校に通う小学生との自然体験の度合いや道徳の内容項目の達成程度の違いがあるか否かの検討、の二つの目的を達成することから、小学校学習指導要領、道徳の内容項目から見た自然体験の効果を測定できる質問紙法を開発しようとした。このため、自然観察活動を行うクラブに所属する第4、5、6学年の小学生と公立小学校の第4、5、6学年の小学生、合わせて662名を対象とした質問紙調査を実施した。その結果は次の様になった。

(1)　開発した質問紙は構成概念妥当性があると考えられる。また、質問紙全体及び各因子について信頼性はあると考えられる（結果IとIIより）。

(2)　クラブと公立小学校の小学生により道徳の内容項目に応じた行動を行っているのか、あるいは生活体験や自然体験に関して違いがある（結果IIIより）。

ここで、これらの結果の含意を考える。

結果（1）は、開発した質問紙が妥当性と信頼性があることを示している。

結果（2）は、次の様に考えられる。この結果は、道徳の4つの内容項目に対応させるとI、II、IVに該当する6つの質問項目とIIIに該当する2つの質問項目に関するものである。また、この結果は、尺度値の平均値の差に違いに着目したのであれば、道徳の内容項目に対応した行動を行うことができるのかの小学生の実態を自然体験の度合いによって見ることができるといえる。よって、この質問紙は小学生の実態、特にクラブに所属する子どもと公立小学校の子どもとでの違いを調べることができると考えられる。

ここで、道徳の内容項目に対応した行動を行うことができるのかの小学生の実態と自然体験の度合いとの関係を把握するために、結果A、B、C、Dのそれぞれの含意について考察する。

まずは、因子2と3の生活体験と自然体験の度合いを表す結果Cと結果Dを見る。生活体験に関しては、クラブの小学生と公立小学校の小学生とで違いを見いだすことができなかった。自然体験に関しては、危険率1パーセントの確率で有意にクラブの小学生が公立小学校の小学生よりも体験を行っていることがわかる。このことを踏まえて、道徳の内容項目に対応した行動を行うことができるのかの違いを考察する。

因子4に含まれた道徳の内容項目IIIに対応する結果Bを見る。道徳の内容項目III「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」に対応した行動として質問項目11と12が該当する。質問項目「11　自然を見て感動したことがある」は、小学校学習指導要領の第3、4学年の内容「III　(2)　自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動物を大切にする。」「III　(3)　美しいものや気高いものに感動する心をもつ。」に対応する。また、質問項目「12 自然を守っていこうと思う」は、小学校第3、4学年の内容「III　(1)　生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。」に対応する。これら2つの質問項目でクラブの小学生と公立小学校の小学生とで1パーセントの危険率で有意な違いが見られたことは、クラブの小学生は、公立小学校の子どもに比べて「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」の行動を行っていることが想定できる。

因子1に含まれた道徳の内容項目I、II、IVに対応する結果Aを見る。まずは、道徳の内容項目I「主として自分自身に関すること」に対応した行動として質問項目3、4、5が該当する。質問項目「3 私は友達が悪いことをしていたら注意している」は、小学校学習指導要領の第3、4学年の内容「I　(3)　正しいと判断したことは、勇気をもって行う。」に対応する。また、質問項目「4　自分の性格の中で良いところを知っている」は、小学校第3、4学年の内容「I　(5)　自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。」に対応する。さらに、質問項目「5 私はどんなことでも一生懸命に取り組んでいる」は、小学校第3、4学年の内容「I　(2)　自分でやろうと決めたことは、粘り強くやりとげる。」に対応する。これら3つの質問項目でクラブの小学生と公立小学校の小学生とで5パーセントの危険率で有

意な違いが見られたことは、クラブの小学生は、公立小学校の子どもに比べて「主として自分自身に関すること」の行動を行っていることが想定できる。

同様に、道徳の内容項目II「主として他の人とのかかわりに関すること」に対応した行動として質問項目6、10が該当する。質問項目「6　誰に対しても挨拶をしている」は、小学校第3、4学年の内容「II　(1)　礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。」に対応する。また、質問項目「10　困っている人がいたら助けている」は、小学校第3、4学年の内容「II　(4)　生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。」に対応する。これら2つの質問項目でクラブの小学生と公立小学校の小学生とで5パーセントの危険率で有意な違いが見られたことは、クラブの小学生は、公立小学校の子どもに比べて「主として他の人とのかかわりに関すること」の行動を行っていることが想定できる。

同様に、道徳の内容項目IV「主として集団や社会とのかかわりに関すること」に対応した行動として質問項目15が該当する。質問項目「15　日本・日本人の良いところを知っている」は、小学校第3、4学年の内容「IV　(5)　郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ。」並びに「IV　(6)　我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。」に対応する。この1つの質問項目でクラブの小学生と公立小学校の小学生とで5パーセントの危険率で有意な違いが見られたことは、クラブの小学生は、公立小学校の子どもに比べて「主として集団や社会とのかかわりに関すること」の行動を行っていることが想定できる。

謝辞

本研究は、東京都千代田区の千代田学の支援を受けてすすめてきました。この場をお借りして、千代田区に感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

1) 文部科学省，小学校学習指導要領解説道徳編，2008.
2) 川崎友絵，園田悦代，小学生の「自然体験」と「生活体験」に関する実態調査，小児保健研究，第63巻，第1号，pp. 23-30, pp. 27-29, 2004.
3) 土屋隆裕，「子どもの体験活動等に関する調査」結果から，中央調査報No. 504, pp. 4549-4553, 1999.
4) 平成11年生涯学習審議会，「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」答申, 1999.
5) 高原哲史，荒木紀幸，「自然体験・野外活動の教育的効果に関する調査研究」，神戸親和女子大学大学院，第2巻，pp. 75-84, p 84, 2006.
6) 斎藤哲瑯，服部英二，舟橋和夫，木村猛能，福谷麻里，「子どもたちの自然体験・生活体験に関する調査研究」，マツダ財団，研究報告書，VOL. 11, pp. 31-45, p 41, 1998.

Summery

It is reported conventional some in the study about the association between natural experience and morality. However, I was not able to find the contents item of the course of study and the study that let you cope. Therefore I developed a question paper to correspond to four contents items of the course of study. Using a question paper, a difference was seen by the degree of contents item of the morality and the nature experience in primary schoolchildren registered at a board school with the primary schoolchild who participated in the natural observation club which went the natural observation activity well. From this, as for the question paper that it developed, it became clear degree of the natural experience and that there were distinction characteristics of the tendency that acted for the contents item of the morality.